

《コメント》

# 〈広島／ヒロシマ〉と音楽

小田 智敏

道場親信さんと東琢磨さんのご報告を受け、コメントをさせていただきます。もともと、私はお二人の報告に直接コメントするのではなく、〈広島／ヒロシマ〉をめぐる二つの音楽を例に、文化運動のなかで音楽がもちうる可能性、とくに危険性を考察することで役割に代えたいと思います。

今日は広島以外の土地からいらした皆さんもたくさんおられますので、まず「いま広島で一番熱い歌」と言うべき「オバマジヨリティー音頭」をご紹介します。

ご存知のとおり今年一月に就任したオバマ米国大統領は、四月にプラハで行われたNATO会議の演説で核兵器廃絶の意思を示しました。多くの人が指摘しているとおり、この演説はむしろ、全世界の核兵器の（廃絶も含む）管理を主導するのは米国だ、という宣言なしの恫喝と読むべきでしょうが、秋葉忠利広島市長は、五月ニューヨークの国連本部での核拡散防止条約（NPT）再検討会議準備委員会で折り鶴を片手に演説し、世界の大多数の人々は核兵器なき世界を目指すオバマ大統領を支持している、私たちは

オバマジヨリティー（Ohamajoty）である、と述べました<sup>①</sup>。秋葉市長はさらに、NPT再検討会議に向けて核兵器廃絶の気運を盛り上げるため、広島市の事業として「オバマジヨリティー・キャンペーン」を行うと発表しました<sup>②</sup>。ちなみに私はこのキャンペーンに疑問を抱き地元新聞に投書しましたが、これは採用されませんでした<sup>③</sup>。それはさておき、このキャンペーンでは、ロゴ入りTシャツや記念品、さらにはPRソングの制作も企画され、キャンペーンに賛同した広島県郷土民謡・踊協会有志が約二ヶ月をかけて制作し、めでたく公式PRソングの一つに採用されたのが「オバマジヨリティー音頭」です。その歌詞は、以下のようなものです。

オー オー オバマ オーバーマジヨリティー

シャン シャン シャンときて マジヨリティー

ハー 本当に 核なき平和をね 全力尽くして 世界のために  
力満ちたる 約束の 次はアクション Yes, you can.

応援してるよ 世界から みんながあなたのサポーター

皆さんも笑っておられるように、この音頭は失笑を禁じえないものだと思います。ところが、この無邪気な音頭は場合によっては激しい怒り呼び起こします。ご紹介するのは、地元新聞に掲載された、「オバマ音頭に憤り」と題される広島市安芸区在住自営業五五歳男性による投稿です。記録として全文引用させていただきます。

「オバマジヨリティー音頭」なる歌を核廃絶を目指す広島市の公式行事で使うと聞いて仰天した。私のように被爆二世だった恋人が若くしてこの世を去り、つらい思いをした人間にとつて、

違和感がある。原爆投下という人類の悲劇が、まるでお祭りのような扱いを受けることに激しい憤りを感じる。

原爆に関係ない人には分からないだろうが、本人のせいではないことが原因で愛する人を失う、これは耐え難いことなのだ。私は今まで語ったことはない。しかし、あの踊りを見たら、犠牲者の上で踊っているような気がしてならない。

「ヒロシマの心を世界に、ヒロシマの歴史を世界に」の心がにじみ出る歌なら私は心から喜ぶ。この歌が、踊りが被爆地・ヒロシマを世界にアピールする鎮魂歌になると思えるのか。関係者は良く考えて欲しい。」<sup>4)</sup>

一週間後同じ投書欄に、広島市市民局文化スポーツ部文化振興課長名による回答が掲載されました。「核廃絶の実現が目的『オバマ音頭』に憤り」にお答え」と題されたこの投稿も、記録として全文引用させていただきます。

「一八日付広場欄の『オバマ音頭』に憤り」とのご意見に対し、説明させていただきます。

広島市は、「核兵器のない世界」に向けたオバマ米大統領の演説を明るい希望として、その核兵器のない世界という大目標を実現するため、同大統領と志を同じくする世界の多数派の市民を「オバマジョリテイ」と呼び、キャンペーンを強力に展開しています。

今回の「オバマジョリテイ音頭」は、このキャンペーンの趣旨に賛同した文化団体の方々が自主制作し、市に活用を提案されたものです。

この音頭は、大統領の演説を明るい希望として、核兵器のない世界を願い、皆でもり立てていこうという趣旨で作られたもので、

その歌詞は原爆投下を題材にしたものではありません。

被爆者団体の方々は「さまざまな立場の人がおのおのの手段で平和を訴えていくことが大事」「明るくて良いと思う」と言っておられました。市は、この音頭をキャンペーンソングの一つとして学校や地域行事での活用を働きかけていきたいと考えています。<sup>5)</sup>

「オバマジョリテイ音頭」そのもの、それをめぐるこのやり取りには、私たちが考えるべき問題が数多くはらまれているように思えます。

まず、この音頭がふだんから文化活動を行っている市民の自発的善意によって制作されたことは、支配体制による民衆の文化活動の篡奪という面からとらえなければなりません。ある人々がマジョリテイか否かという問題は、数ではなく、権力関係のなかでどの位置を占めるかという質に関わります。核兵器廃絶を願う人たちがどれほど多くとも、核兵器管理にかかわる決定に与れない以上マジョリテイではありえません。核兵器超大国の大統領を賛美するこの音頭を歌い踊ることは、現在の支配的体制に組み込まれ、それを支える典型的なマイノリテイのふるまいです。

また、現在の民謡愛好諸団体が、仮に一般に保守的な心性をもち政治的に初心であるとするなら、そうした状態そのものが文化的・政治的問題となります。私たちが民謡などの土着芸能にどのように向き合うかも考える必要があるでしょう。<sup>6)</sup>

次に、音楽のもつ暴力性の問題です。すでに石川淳が一九三八年発表の「マルスの歌」で逃れようのない軍歌の暴力性を描いたとおり、音楽はそれを拒否する者の耳をも襲い、その情動に直接

介入します。オバマジョリティー音頭に憤った投稿者の怒りも、それが音楽であることとおそらく無関係ではありません。

この投書に対する広島市の回答は、核兵器廃絶と原爆を投下された体験とを峻別し、「オバマジョリティー音頭」が、ひいてはこれを公式PRソングの一つとして採用している「オバマジョリティー・キャンペーン」もまた、いわゆる「被爆体験」とは無関係な核兵器廃絶の訴えであると認めています。回答文に引用されている「被爆者団体の方々」の言葉もまた、はしくもこの音頭やキャンペーンが「被爆体験」とかわりないものと受け止められていることを示しています。一般論として「被爆体験」とは無関係に核兵器廃絶は訴えることはもちろん可能ですが、広島市の回答は、原爆を落とされた広島がなぜわざわざそんなかたちで核兵器廃絶を訴えるのか、という疑問に答えるものではありません。ここに浮き彫りにされているのは、行政や「町づくり」にかかわる広島のマジョリティーと、その視野から零れ落ちるマイノリティーとの対立であり、象徴的な言い方をすれば、〈広島／ヒロシマ〉の乖離分裂なのです。

広島市の実際のありようと原爆体験との乖離分裂は、実は今に始まったことではありません。早くも、一九四七年八月六日に開催された第一回平和祭では、市内を花電車が走り、「ピカッとひかった原子の玉にヨイヤサーとんであがった平和のハトよ」という歌詞の音頭が歌い踊られ、人々の怒りを買っています<sup>7)</sup>。この平和祭は、市と商工会議所で結成された協会の主催で、その開催意図は「八月六日を単に悲惨なる思い出の日とすることなく、この日こそ世界平和が蘇ったということを永久にメモライズする」

と語られています<sup>8)</sup>。米軍占領下とはいえ、「この日こそ世界平和が蘇った」とするのは原爆被害者の実感とは著しく乖離していたことでしょう。

一九四七年の音頭も二〇〇九年の音頭も、ともに死者や原爆被害者を置き去りにして、より上位のマジョリティーに取り入ろうとする姿勢を示しています。その姿勢がマイノリティーの耳を打つとき、音楽は暴力として作用すると考えられます。私たちが音楽を媒体とする文化運動を見るとき、またその今後のあり方を構想するとき、音楽がこのような暴力として働く危険性を忘れてはなりません。

本日午前中は、「原爆の凶」などの絵画表現が取り上げられ、体験の当事者／非当事者という問題が議論されましたが、抽象性の高い音楽表現の場合、当事者／非当事者の区別はあまり問題にならないと思います。ですが逆に、そもそも音楽は何を描くのか、描けるのか、描いてよいのかが問題となります。現代日本において文化運動者としての自覚を最も先鋭にもつ作曲家の一人、林光（一九三一〜）の無伴奏合唱曲『原爆小景』を例に、この問題を考えてみたいと思います。

一九五二年、東京藝術大学在学中の林光は、丸木位里・俊の『原爆の凶』が秋の大学祭で展示されるのを機に、『原爆の凶』に取り囲まれたなかでの「原爆カンタータ」の演奏を企画しました。峠三吉『原爆詩集』『序詩』を最初に置き、原民喜『原爆小景』から「水ヲ下サイ」で当時を描き、「碑銘」で現在に焼きつけ、「永遠のみどり」で平和な未来を展望するという構成で、順に間宮芳生・寺島尚彦・外山雄三・林が作曲分担するという集団創作

でした。原爆被害の実情がまだあまり知られていなかった当時、林らに作曲困難と感じられていたのは「水ヲ下サイ」だったらしく、寺島が名乗りを上げたときにはほっとしたと林は述懐しています<sup>9)</sup>。

このあと林は単独で『原爆小景』に取り組み、第一楽章「水ヲ下サイ」を一九五八年に、第二楽章「日ノ暮レチカク」第三楽章「夜」を一九七一年に完成します。「水ヲ下サイ」は、原民喜の詩句のそれぞれに日本語の抑揚に忠実な音形を与え、これを積み重ねて作曲されています。曲の頂点をなす「天ガ裂ケ／街ガ無クナリ」という句には、ほとんど無調の旋律が当てられ強烈な印象を与えますが、全体を通じて「旋律による歌」になっています。これに対し一三年後に作曲された「日ノ暮レチカク」「夜」では、詩句が歌われることはほぼ放棄され抑揚を欠いた語りとなり、音楽的な動きのある部分は意味のない母音が担うことになりました。

「夜」に用いられる「コレガ人間ナノデス」という句にはもはやリズムすら与えられていません。原民喜の『原爆小景』は、ご承知のとおりほとんどがカタカナで書かれ、ろくな道具もないまま墓碑に刻み込んだ文字のような異様な印象を与えますが、林の「日ノ暮レチカク」「夜」はこの印象によく見合うものです。アドルフは、現代音楽の美は「美の仮象を拒む」<sup>10)</sup>ところにあると喝破しましたが、林の曲にこの「美の仮象を拒む美」を見ても不当ではないでしょう。

これほどの曲を書きながら、しかし林自身の胸中は複雑だったようです。一九七三年に発売されたこの曲のLPレコードに彼は以下のような文章を寄せています<sup>11)</sup>。

「さいきん、ある書評週刊紙が募集した懸賞論文の入選作の中に、原水爆反対のためという大義名分を免罪符にして、なんの痛みもなく被爆者の写真をかかげて歩く「運動者」たちを告発したことばがあった。／私は、私の「原爆小景」のことをあらためて思い起こした。私はそのような「運動者」たちと私とはちがう、私の作品は、被爆者の引き延ばし写真のパネルをかかげて大通りを練りあるいているようなものではない、とつよく否定する内心の声を聞きながら、しかし浮かぬ気分であった。あるいみでそのことは、一九五八年に第一部の「水ヲ下サイ」を書いていらい、無意識のうちに対決をさけてきた。しかしいつかはまともに向きあわなければならぬ問題で、私にとつてはあったのだから。たぶん、「原子爆弾」を素材として作品を書くということがすでに、被爆者のパネル写真をかかげて街をあるくという行為で、いくぶんかはあるのだ。」

林が恐れるのは、たとえマイノリティーに連帯しようという意図であっても、作品が彼らに対する暴力として働く危険です。これは、音楽という媒体に限らず、悲惨な出来事を表現対象にするときにつきまとうもので、つづけて林は「今後、とうぶんのあいだ、もしかしらざつと、私はこういう素材で曲は書かないだろうと思う」とまで書いています。

林の構想では『原爆小景』は、原典でも最後に置かれた「永遠のみどり」の作曲によって完結するはずでした。ようやく平仮名が現れる「永遠のみどり」に、安堵感を覚える読者は私だけではないでしょう。「ヒロシマのデルタに若葉うづまけ」と祈るこの詩は、素人目には『原爆小景』のなかで最も音楽化しやすく、ま

たそうするにふさわしく、原爆死者・被害者に対する暴力となる危険の少ない詩と見えます。ところが林は、二一歳のときに自ら取り上げたこの詩の作曲を、「日ノ暮レチカク」「夜」の完成以後約三〇年にわたってためらいます。その理由を彼は一九七五年にこう書き記しています。

「じつさい《ヒロシマのデルタに若葉うづまけ／死と焔の記憶によき祈りよこもれ》とはじまる「永遠のみどり」がうたわれることで、おそろしい同時代の歴史劇である『原爆小景』は終わる、終われるのだと私も思う。だが、核の恐怖がなにひとつ解決していない今、《ヒロシマのデルタに若葉うづまけ》などという詩句に作曲することが可能だろうか。」<sup>(12)</sup>

林が抱いているのは、まだ実現していないものを求める祈りが歌われることによつて、それが実現したという錯覚を与えるのではないか、すなわち、音楽が今ある世界の矛盾を隠蔽するイデオロギーとなるのではないか、という危惧です。結局林は、二〇〇一年に「永遠のみどり」を、一九五二年の曲とはまったく異なる、グレゴリオ聖歌の模倣という驚くべき手法によつて作曲しました。林が狙ったのは、現代日本の文化状況の中でグレゴリオ聖歌が響く違和感と、切実な祈りの表現の両立であろうと思われま

す。林のほぼ半世紀にわたる『原爆小景』への取り組みは、音楽にはらまれる暴力とイデオロギーの危険との戦いであつたといえます。林が与えた結論は、もとより彼自身の、一回かぎりの答えでしかありません。私たちもまた、音楽を媒体とした文化運動を構想するとき、林が直面し続けた問題に自ら対峙することになるのです。

## 注

1 秋葉市長のこの演説は、広島市のインターネット上の公式ページで読むことができます。

<http://www.city.hiroshima.jp/ryyou/pod/genko/mayor090505.pdf>

2 秋葉市長によるキャンペーンの趣旨説明は、<http://www.city.hiroshima.jp/www/contents/0000000000000/1244613195105/index.html>で読むことができます。

3 私の没投稿は、東琢磨・高雄きくえ編『平和構築』つてなんですか?』（広島女性学研究所、二〇〇九年）三五頁以下に収録されています。

4 中国新聞二〇〇九年八月一八日付投書欄（第二四面「広場」）

5 中国新聞二〇〇九年八月二五日付投書欄（第二一面「広場」）

6 たとえば、『ヒロシマ・声なき声』（二〇〇〇年）などで知られる現代作曲家細川俊夫は、「二つの日本民謡——声とギターのための」（二〇〇三年）で五木の子守唄を取り上げ、貧しい子守の少女が抱く悲しい希望に焦点を合わせた編曲を行っています（細川俊夫「恋歌」CD Musiccape MSCD-0029、二〇〇九、解説小冊子五頁参照）。

7 中沢啓治『はだしのゲン』には、この音頭を歌い踊る仮装行列に対して殴りかかる労働者たちの姿が描かれています（中公文庫コミック版第3巻、一九九八年、二六六頁以下）。研究会当日は、この音頭を「広島復興音頭」と紹介しましたが、「広島復興音頭」には一九四六年制作と一九四九年制作との二通りの資料があるため、ここでは題名未詳としておきます。

8 中国新聞社『年表 ヒロシマ 核時代50年の記録』、一九九

五年、四三頁。

9 林光『私の戦後音楽史』、平凡社ライブラリー、二〇〇四年、三二五頁。なお同書には、林が当時作曲した「永遠のみどり」の楽譜の第一頁が写真版で掲載されています(二二七頁)。

10 Theodor W. Adorno: Philosophie der neuen Musik. Gesammelte

Schriften Bd. 12, Frankfurt a. M., 1975, S. 126.

11 林光作品集『原爆小景／動物の受難』、日本ビクター、一九七三年、SIX-1012。

12 林光『混声合唱のための原爆小景「完結版」』、全音楽譜出版社、二〇〇三年、四頁。